『とうほくの社会科教室』1966年3月（東京書籍）

指導内容の構造化ということをどう考えるべきか

プログラム教育研究所　矢　口　　新

まず指導内容という概念をはっきり確かめてみる必要がある。たとえば、世界の国々という単元で、指導内容というものをどう考えるのであろうか。普通には国々の事情を理解させるなどという言葉で、何となくわかったような気になっているが、それではそれぞれの国の人々はどう、産業の種類は何か、産物はどうなのか、といったようなことをインフォメーションとして与えることを、指導内容と考えるのか、あるいはもっと別なことを指導内容と考えるのか。普通は上にあげたようなインフォメーションを与えること、そのインフォメーションの内容を指導内容と考えちがいしている人が多いのではないだろうか。もしそういうまちがった観念にもとづいて指導内容の構造化ということを考えているのだとしたら、それはあまり意味のあることではない。

指導内容というものについて、これをインフォメーションの内容を考える思想はわが国の教育の歴史の中に古くからあるのである。一種の観念主義的内容観といってよい。そしてそれは、教科書暗記主義、言葉による教育などにつながっている。知識偏重などといわれる場合の知識というのも大ていはこの観念主義的知識なのである。それは、指導の内容ではないのである。それは指導する際の材料であるにすぎない。そういうものを使って人間にもたせるべき能力があるのである。

これを前の世界の国々というような単元でいえば、そこで指導する内容は、人間が国々のことを見ていく、しらべていくときの物の見かたであり、行動のしかたである。これが正身正銘の指導内容なのである。第一、今それぞれの国の人々がどれだけとか、産業がどうかといっても、それはどんどんかわっていくことで、そんなものをインフォメーションとして与えるだけでは教育としては意味がない。単なるインフォメーションにすぎない。おぼえていて忘れなかったら、かえって大変である。大切なことは、そういう情報をもとにして、この国はどうかということをまとめていく科学的な思考の方法や態度なのである。これもただ漫然と考え方といっているのでなく具体的に考えられなければならぬ。

指導内容の構造化ということは、そういう意味の内容についていわれなくてはならないのであって、そう考えるとこれまでぼんやりと考えていたことをまず洗いなおしてみる必要がある。

もう一度世界の国々についての例でいえば、国々を見るときの考え方や態度をつくるにはどういう内容があるのか。一つの国について人口というものをどう考えるのか、その自然環境をどう考えるのか、それがいろいろな所にいろいろな影響をしている個々の姿があろう。産業というものをどう考えるのか。それらのことを考えるのに一つの国だけで見ていたのではとてもわからない。さまざまな国をとって、さまざまなあり方を分析し、それを比較し、そこから大凡の考え方を筋立ててこなくてはならぬ。その場合にはインフォメーションは多くあればよいが、しかしそれ自体は忘れてもよい。統計年鑑でも何でもそういった種類のものを取れば、いつでもわかるのである。そういうものを見て、それを使って考えることができるようにしてやらなくてはならない。

このように考えると、指導内容の構造化というのはいわゆる知識の構造化ではなく、生徒の中に育ててやるべき能力とその形成のプロセスの構造化なのである。これこれの材料を使ってこういうことを見たりしらべたり考えたりする能力をつけてやるというような分析がなされなくてはならぬ。そこに結果として、どういう能力がつけば世界の国々を考えることができるかという構造がはっきりしてくるのである。他の単元でも同様に考えられる。